

ラサリーラー
愛のマンダラ
『バガヴァタ・プラーナ』の物語より

第6部

神のダルシャン

他のゴーピーたちにも、魔法のような夜は変容をもたらしていました。彼女たちが至る所にクリシュナの姿を捜した時、それはまるで自分たちの周りの世界を新しい目で見始めたかのようでした。森の生き物たちに大きな愛を感じる者もいます。花やシダ植物の複雑な美しさ、そして木々の太さと力強さに感嘆する者もいます。ある者は川の端に行き、その力強い流れをじっと見詰めました。またある者は星々が散りばめられた夜空の広大さに驚嘆しました。今、彼女たちは森や生き物たちのささやきを聞くことができました。

「私たちは神自身のさまざまな形です。私たちを愛しなさい。そうすれば彼は見つかるでしょう」

そして徐々に、一人一人の中に理解が深まり始めたのです。もし木や花や動物の一つ一つが神の形だとしたら、ゴーピーたちは目にしたあらゆる場所で神のダルシャンを持つことができたのです。この時、彼女たちの中に喜びと驚きが湧き起こり、そして再び、ちょうどクリシュナの前でそうだったように、自分たちの良さや美しさを感じました。今、彼女たちは互いの中にも良さと美しさを見えています。それは甘美な体験です。要求も切望もすべて消えていました。

慈悲深い月は、まだ頭上で明るく輝いていました。それはまるで惑星たちが、リーラーの美が長く続くように、その進みを遅らせているかのようです。二人、そして三人と、ゴーピーたちは腕を組み合って空き地に戻って来ました。そこで地面に腰を下ろし、シュリー・クリシュナの名をチャンティングし始めました。彼女たちの声は愛で鳴り響き、夜の空気を満たします。彼女たち

はどこまでも優しく歌い、その瞬間に完全に没頭し、その中に純粋なバクティ——神への愛、自分自身への愛、互いへの愛——を見つけました。程なく——チャンティングを通して——彼女たちは再び、心をつかんで離さないクリシュナの横笛の音を聞きました。次々に、彼女たちは目を開けました。

シュリー・クリシュナは、彼女たちと一緒に森の中の空き地に戻っていました。トウルシーとジャスミンの花輪で飾られて。晴れやかに皆にほほ笑みます。

「私はあなたたちが心の中で感じている愛だ」と、彼は言いました。「私を忘れないように。私はあなたたちと共にいる」

クリシュナが声に出して言ったのか、それとも彼女たちの心の中でそう言ったのか、分かりません。それは問題ではありません。彼女たちは今、どちらも同じだということを知ったのですから。

そしてクリシュナ神は、ゴーピーたちを立ち上がってもう一度踊るように促しました。

ゴーピーたちは一斉に立ち上がりました。クリシュナの周りに大きなゆったりとした輪を作りました。今回は、目立とうとする者も、後ろに隠れる者もいません。彼女たちの動きは調和し、旋回する鳥の群れのように優雅でした。

このクリシュナのラサリーラーの集大成を見て、神々や天上の音楽家たちから満足のため息が聞こえてきました。彼らは今、愛のマンドラを見たのです。中心には青いサファイアのシュリー・クリシュナ、そして彼の周りにはらせん状に色とりどりのゴーピーたち。

ゴーピーたちは皆、神への愛に没頭し、夜明けまで踊りました。そして、疲れ、満たされ、それぞれの家に帰って行きました。そこではすべてがうまくいっていました。子どもたちは無事で幸せそうで、家族たちは彼女たちがいなかったことすら知らないようでした。

クリシュナの牛飼いとしての時が終わりを迎えたのは、それから間もなくでした。彼は、王子としての人生を受け入れ、王国の正当な統治者を回復させるためにマトゥラーに呼び戻されたのです。しかし彼は、彼が育ったヴリンダーヴァンの優しい人々を決して忘れることはありませんでした。そして人々もまた、彼を、魅惑のラサリーラーを、決して忘れませんでした。あの時クリシュナは、彼ら自身の中で、彼ら自身に、互いに、そして周りのすべてのものに感じた愛がクリシュナであると示したのです。



© 2023 SYDA Foundation®. 著作権所有。